

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 12 日現在

機関番号：33805
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2015
課題番号：25580068
研究課題名(和文)戦後の青春小説 - 若草文庫と秋元ジュニアシリーズを中心に

研究課題名(英文) Juvenile Fiction in Postwar Japan

研究代表者

田中 慶子 (Tanaka, Keiko)

静岡産業大学・情報学部・准教授

研究者番号：40249248

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：若草文庫と秋元ジュニアシリーズはロールモデルを求める少女の読書の牽引役となった。村岡花子は翻訳家として性を排除した少女小説のジャンルを確立した。表紙買いが多く、読者層は中学生から社会人まで幅広く男子の愛読者もいた。少女探偵ものと孤児が主人公の家庭小説は現在まで読み継がれている。洋画の原作や中流階級の娘が主人公の学園ロマンスが主流だった。経験者の留学アドバイスも掲載され、若い読者のアメリカ志向を助長した。だがデートやソロリティなどのアメリカの学園文化はなじみにくく、卒業舞踏会のドレスに頭を悩ませるような消費主義は当時の日本の生活レベルとは隔たりがあり過ぎた。

研究成果の概要(英文)：In the 1950s Wakakusa-Bunko and Akimoto Junior Series provided guidelines for Japanese girls seeking for a role model. Most of the readers were tempted to buy the books by the cover design. The age range of the readers was wide enough to include junior high school students and working adults and even males. Domestic novels are in print as ever. Hanako Muraoka as the translator established a genre of girls' fiction which is asexual. The popular titles were screen plays and high school romances of which heroines were middle-class girls. Some valuable suggestions by a senior who had returned from study in America appeared in the newsletter of the book to encourage the longing for studying abroad among the young. But the American school culture of clubs and dating were unfamiliar and the consumerism involved in worrying about a dress for proms was too far removed from the quality of life in Japan at the time.

研究分野：英語圏文学

キーワード：読書 少女小説 アメリカニズム 翻訳文化 ハイティーン ジュブナイル 学園文化 家庭小説

1. 研究開始当初の背景

現代の若者の読書離れ、英語力の低下に加え文部科学省の海外留学倍増計画にもかかわらず、海外留学者は減少し、内向き志向が問題視されている。特に昭和30年代には北米の翻訳小説がよく読まれ、海外志向も英語学習熱も強く、文学部英文科の人気もあった。当時の留学ブームを支えたのは何だったのか、時代を席卷し、若者文化をリードした秋元ジュニア・シリーズの存在を知り、筆者は海外少女小説紹介の先駆的存在であった村岡花子の業績を中心に、本がもたらす外向き志向の仕掛けについて考察することにした。

2. 研究の目的

若者の海外志向を育み、英文科志向の下地となりえたのが戦後の翻訳小説であり、外国映画ではなかったか。本研究ではこの仮説を実証するために、秋元書房ジュニア・シリーズを中心とした絶版図書と今なお読み継がれている図書を検証し、昭和30年代の少女向け翻訳小説の受容のありかたを調べ、出版文化の少女への影響力をみることを目的とする。さらに商業主義の出版社にも学校関係者にも読書と教育の相関性の再認識を期待する。

3. 研究の方法

(1) 戦前、戦後の少女雑誌に扱われた翻訳小説を収集する。特に村岡花子の翻訳活動に焦点をあてていく。

(2) 秋元書房ジュニア・シリーズの外国翻訳小説とその原書を可能な限り入手し、その読者の意見、感想を「友の会」の頁から採集し、人気作品の理由や年代層を分析する。

(3) 読者の意見、出版者への要望から時代の集団的メンタリティを抽出する。同シリーズに対する教育機関や世間の評価、編集部が「友の会」で提供したさまざまな企画に対する反響を当時の他の新聞雑誌などの記録で調べる。さらに出版事業を超えて、化粧品会社や映画配給会社と協働もした秋元書房ジュニア・シリーズの少女文化への影響力の大きさを探る。

村岡花子の没後、秋元書房ジュニア・シリーズに多く含まれていく日本人作家によるジュニア小説の読者の変化を調べる。同シリーズ刊行終了後の他の出版社の少女向け図書の動向も調べる。

4. 研究成果

秋元ジュニア・シリーズを主とした古本を古書店、オークションで約150冊収集し、戦後の少女小説の出版事情について調べた。三笠書房社長の竹内道之助が洋画の原作の翻訳を出版していた。『風と共に去りぬ』でベストセラーになり、フランス映画の「うたかたの恋」、「ぼくの伯父さん」、ドイツ映画の「制服の処女」、アメリカ映画の「緑の館」、「メイム叔母さん」などが少女向けの「若草文庫」

シリーズとなった。

(1) 村岡花子の業績

村岡花子は戦前からアメリカのオルコットやエレン・ポーターなどの少女小説を翻訳していた。戦争で帰国する宣教師から託された「グリーン・ゲイブルズのアン」(『赤毛のアン』)の翻訳は戦後、「若草文庫」で日の目を見る。村岡は多感な少女時代カナダのメソジスト派の東洋英和女学校の寄宿舎で宣教師たちの西洋の生活習慣にじかにふれ、先駆的な英語教育を受けていたので、少女小説の翻訳にその国際感覚と語学力が発揮された。また同窓の柳原白蓮や片山廣子との交友で日本語のセンス、日本文学の素養も陶冶されたようである。

村岡花子は秋元書房友の会・伊勢丹共催の「ジュニアおしゃれ教室」講演で、日本の出版界において、児童文学を卒業した年代の少女が読む本のジャンルが手薄であることを問題視し、読者から寄せられる手紙に訴えられている大人の愛欲を描いた本への抵抗感が理解できると述べている。村岡花子が秋元ジュニア・シリーズに託した意義はまさしくここにあるといえる。

(2) 映画の力と友の会

三笠書房常務営業部長だった秋元一仁が独立して秋元書房を起業し、「若草文庫」と同じ体裁で1959年から主に戦後のアメリカの少女小説と欧米の映画化作品を月2回発行した。フランス映画「お嬢さんおてやわらかに」、「恋の手ほどき」、ドイツ映画「朝な夕なに」、「大人になりたい」、「めざめ」、「いつか来た道」、イタリア映画の「芽え」、「三月生まれ」、「みんなが恋してる」、「南十字星の下」の原作映画が公開され、友の会で試写会招待があった。だが原作がヨーロッパでも『若い娘アリアーヌ』や『恋の手ほどき』のように映画はアメリカ製作のものが多い。『若い娘アリアーヌ』はフランスでベストセラーになった原作で処女性を保ちつつ売春婦のような男性遍歴を重ねる女子大生のアプレ・ゲールである。読者からは巻末の「友の会」サロンのページに「私たちには刺激が強すぎます。どうしてこういう本を出すのですか」と怒りの投書があった。『激流』と『霧の晴れ間に』と共に装丁がシニア向けとして差別化されてある。だが映画は「昼下りの情事」という煽情的タイトルで日本公開されたにもかかわらず、オードリー・ヘップバーン演じるアリアーヌは後述するナンシー・ドルーのような知的で清純なキャラクターに変容していた。奔放なフランス製のヒロインはアメリカ版ではグッド・ガールになるのである。秋元ジュニア・シリーズの「友の会」で試写会の様子は、「サロン」でも紹介されヒロインの髪型やスカーフの巻き方が流行した。

『制服の処女』は秋元ジュニア・シリーズ

ではリメイク版のロミー・シュナイダー主演の映画のスティールが表紙となり、試写会招待があった。母親の世代がレオンティーネ・ザガン監督の1931年版映画を見ていたせいもあるらしく、応募が殺到し、反響が相当大きかった。

新潮社も若草文庫に体裁を似せた若い娘が主人公のシリーズを1958年前後に出していた。これについては秋元ジュニア・シリーズの「友の会」の頁に苦情が寄せられていた。「友の会」サロンの頁は文通希望コーナーも掲載されるようになった。男子の愛読者も少なからずいて、購入するにも貸本屋で借りるにも勇気が要ったらしい。(菊池仁『ぼくらの時代には貸本屋があった』新人物往来社)「友の会」サロンに掲載された読者の反響というのはさながら現代のソーシャルネットワークに劣らずプロンプトでリアルであったといえる。

(3) 白人中流階級中心主義

アメリカは自由と平等の国というイメージとはうらはらに歴然とした階級社会である。秋元ジュニア・シリーズの作品は白人中産階級がほとんどなのに、階級格差を意識させる『ブルックリン横町』のような貧しいアイルランド系移民を描いた作品は珍しい。下層階級への転落が描かれているのは、「乙女よ嘆くな」のタイトルで戦前から公開されていたブース・ターキントンの『孤独のアリス』である。

(4) 表紙買い

秋元ジュニア・シリーズの海外作品はほとんど翻訳独占権をとっている。新潮文庫と角川文庫からも若草文庫と同タイトルの廉価版が出ていた。それでも秋元ジュニア・シリーズを買う理由はその表紙にあったといえる。「友の会」サロンでは「一番すばらしかった本」とともに「表紙の一番きれいな本」のベスト・テンのランキングが掲載されていた。本には切手のいらぬ愛読者アンケートのはがきが添付され、そのまま投票用紙になっていたのだが、「本書の内容、装丁その他についての感想ならびにご希望」を書く欄が小さいとはいえ、ほとんどの投書が装丁への礼賛に終始しているのは、外国小説の内容が未消化であったということではないだろうか。表紙はアメリカのハイティーン向きの雑誌「セブンティーン」などからカットをとったらしいが、読者に変大好評であった。この現象は2015年終戦70年を記念して文化服装学園博物館(新宿)で「衣服が語る戦争」という展示があり、終戦後のファッション誌の復刊ラッシュ、ドレスメーカー学校のブームなどに、日本女性の洋装への渴望がみてとれて腑に落ちた。

(5) 家庭小説の主人公

秋元ジュニア・シリーズは若草文庫の路線

をほぼ踏襲していた。アメリカ家庭小説の主人公はしばしば孤児であり、親の抑圧が、普通の娘より少ない。『赤毛のアン』、『ポリアンナ』、『少女レベッカ』、『あしながおじさん』がこの例であり、いずれも村岡花子の翻訳がある。赤毛のアンキャラクターはスーパーガールとシンデレラの系譜につらなる。孤児の境遇にもかかわらず、優等生になり、教職を得て理想のパートナーと家庭を築くという成功物語は、実は日本にはなじみが少ない19世紀アメリカに既存のマサ・フィンレイのエルシーブックスという原型があった。村岡訳だと、マリラの言葉遣いがフラットな人物造形になってしまっていて、養母マリラが愛情深い母になるという成長のプロットがわかりにくくなっていることは、山本史朗が指摘している。

またモンゴメリの『風の中のエミリー』と『雨に歌うエミリー』の二部作は作者モンゴメリの自伝的要素が濃いといわれるが、カナダのプリンスエドワード島の移民の、スコットランド人のクランと誇りとかカトリック教徒の低い地位など複雑な階層社会は日本人には難解だったと思われる。

(6) 少女探偵シリーズ

ナンシー・ドルーという少女探偵が主人公のシリーズはアメリカで人気が高かったので、翻訳家の大久保康雄が試みに訳して、秋元ジュニア・シリーズで初めて出した。この原作者はシンジケート団であるが、知的で勇敢な少女探偵は自己を投影するのに格好なキャラクターで、日本の読者にも大好評を博した。

(7) アメリカの学園文化

人気作家とシリーズ

50年代アメリカではベティ・カヴァナ、アン・エマリイ、ロザモンド・デュ・ジャージンが、人気作家であった。いずれも知的階級の出身で、良家のお嬢さんが主人公の学園小説である。村岡花子は「友の会」の講演で秋元ジュニア・シリーズの作品が家庭人を育てていく教育性を絶賛している。多くは姉妹やひとりの主人公のシリーズであり、ハイスクールや大学でボーイフレンドに出会い、デイトを重ね、ステディになり、卒業舞踏会のパートナーになる。主人公はたいてい地味で内気な存在で、対照的な性格の姉がいる。何かをきっかけに思いがけない自分の個性を発見することがある。概ねテーマは普通の子の自己認容という課題である。父は大学教授、母親は作家など知的階級で、娘の要求に対してものわかりはよいが、門限と儉約のしつけは厳しく徹底している。翻訳者のひとり中村能三はあとがきで母親たちにも新しい時代の娘に対する接し方は参考になるので読んでほしいと勧めている。「サロン」でデイトについての問題が提起された時、在米経験のある母親も誌上討論に参加し、日本の

若い男女にもジュニア・シリーズに描かれているような健全な交際に倣ってほしいと述べている。

ベティ・カヴァナは最初の結婚時代のエリザベス・ヘドレーという名前でも青春小説を発表し、またベッツィ・アレンのペン・ネームでミステリーも発表している。ヘドレーと死別後、再婚したMITの学部長である夫と共に世界を旅行し、日本も訪れ、実在の日本人の少女をモデルにした『ジェニー・キムラ』を書いた。日系2世の少女がアメリカの祖母を訪ねていく物語は、ロサンジェルス为学校推薦図書に選定され『さびしくないわ』のタイトルで秋元ジュニア・シリーズに入った。

メアリー・ストールズの微妙な思春期の心理描写は、ジュニア小説でもニューヨーク・タイムズ文芸書評に取り上げられるほど文学性が高い。彼女は児童文学から後のヤングアダルトノベルまでカバーし、作家活動も長きにわたった。

ステディ

エマリイは年頃の娘を持ち、失恋の処方箋といえるアドバイスを作品に込めている。シカゴ郊外に住むパット・マーロウ主人公の三部作では、永遠の愛に憧れ、安定を求めステディになるのを急ぐ子どもたちを心配する親の気持ちが描かれている。男の子からクラスリングやピンを受けとることがステディのしるしである。だがステディになってしまうと他の男子を知る機会がなくなる。バーナビー姉妹シリーズでも大学進学を機に若い恋人たちは別れる。女の子は卒業舞踏会までにパートナーを決めなければならない。本命の男の子から誘われて、蘭のコサージュを贈られることが女の子の夢である。だがそのような段階を踏んでステディになっても、共通の関心や趣味がなければ、付きあっても飽きてくる。結婚を意識しだすと金銭感覚や経済観念のずれも深刻な問題である。あれほど切望したリングやピンが束縛でしかなくなる。「ボーイ・クレイジー」状態にはまってしまったパットは離れていく恋人の心をつなぎとめようと、愛しているという言葉を繰り返すのも虚しく、結局、彼女の恋は自己愛と支配欲でしかなかった。未熟な少女たちは精神的に自立していないから、結婚の意味も知らず、恋人に心変わりさせないために尽くし、肉体を捧げようとする。(少女小説では性的描写は排除され、キス止まりであるのだが。)

ソロリティ

エマリイのバーナビー姉妹シリーズでは、『ソロリティ・ガール』だけが翻訳されていない。アメリカ固有のこの学校文化は日本人にはなじみがないせいか。前後の本ではソロリティは女子社交クラブと訳されていた。アメリカの女子校、女子大ではソロリティという排他的特権サークルがある。ソロリティには、新しく加入する学生にヘイジングと呼ばれる入会の通過儀礼が存在した。いやがらせ、

酷使、女子でも暴力行為などが行われ、新入りはそのナンセンスな身体的精神的凌辱を耐え抜く強さと従順さがメンバーとして期待される。一度、入団が許可されると緊密な先輩後輩関係が結ばれ、引きたてを受けることができる。ソロリティは、スクール・カーストの頂点として具体化されている。ソロリティのメンバーになると、学園のスポーツの花形選手のステディになれる確率も高まる。新メンバーの勧誘は新学期「ラッシュ」という一定の期間になされる。ジーン・バーナビイはハイスクールでメンバーに勧誘され、有頂天になるが、入団してみるとつきあいやドレスにお金がかかり、親にせびっても聞き入れられずバイトを増やしていくしかない。成績は下がり趣味のコースもおそろそかになりボーイフレンドともケンカしてしまい、消耗していく。もはやソロリティのメンバーでいることのメリットが感じられなくなり、ついに彼女は退団を決意し、その時はじめて、既成の価値観から解放されて自分を取り戻す。少女小説はこのような青年時代と学園コミュニティの困難を生き抜く知恵をアメリカの少女たちに授けてくれたであろう。

ひと夏の経験

日本の学校暦は春の卒業、進学で区切りがつくが、アメリカでは学年が六月に終了するため、三カ月という長い夏休みが少女の成長の節目となる。サマー・キャンプ、ユースホステルを泊りながら全米旅行をするバガボンド・ジャーニーなどのイベントに参加し、初めてのアルバイトの経験が、少女の精神的成長に大きく作用する。『すばらしき夏』、『すてきな夏休み』、『夏の終わり』など夏に絡むタイトルが多いゆえである。

十七才

「十七才」というのも、もう一つのキーワードである。『十七歳』、『十七才のルーシー』、『十七歳の夏』、『十七才のデイト』など内外の小説のタイトルに目立っている。モーリン・ディリーの『十七歳の夏』はボランティアによる点訳もされ、シリ・ズ終了後も文庫版になる程に人気が高く、女学生たちの間で原題の「セブンティーンズ・サマー」という流行語を生んだ。ディリーがこの作品を書いたのは大学在学中で、ベスト・セラーとなり映画化もされ青春小説の元祖と評された。彼女はその後ジャーナリストになり、広く海外に取材した。

(8) 母親像の変遷

母親像に着目すると、世紀転換期から20世紀初頭までに書かれた家庭小説はたいてい主人公が孤児もしくは精神的孤児で、赤毛のアンにはマリラという代理母がいた。『若草物語』では聖母のように理想化されたマーチ夫人が姉妹たちの母親である。『リンバロストの乙女』ではコムストック夫人は夫の死が不貞の結果であることを知るまでは娘を冷遇していた。アメリカの少女小説では20

世紀前半は悪い母親はめったに描かれない。『ステラ・ダラス』は大眾小説であったが、映画で有名になり日本では抄訳が村岡花子訳で『母の曲』という少女小説として紹介されたが、下品で教養のない母親が娘の幸福のために身を引く姿は美しい母性愛だと見なされた。

だが 1970 年代に起こった女性解放運動などの社会革命は児童文学にも影響が及んだ。秋元ジュニア・シリーズで『ママ、おこらないで』の著者ハイラ・コールマンの作品を取りあげてみると、1960 年代には有能で社交的な母親と不器用な娘との軋轢が描かれていたが、70 年代後半に発表された『グッバイ、ママ』（評論社）では夫亡き後の母親の精神的依存に苦しむ娘が主人公である。しかも母親は娘のボーイフレンドの兄を異性として意識する。こんな弱い母親の女の性を描いた作品は、1970 年代以降のヤングアダルト小説に顕著になってくる。集英社のコバルト・ブックスにも含まれている。だがこのようなリアルな母親像は、日本とアメリカの経済格差的環境を考へても、逆説的に 50 年代までの理想化された母親よりもずっと精神衛生上よいはずである。娘は母親も弱い人間に過ぎないことを認め、過剰に期待するのをやめて、自立した大人へと成長するのである。

(9) 現実との乖離

エマリイの作品では結婚を急ごうとするカップルが、駆け落ち結婚した夫婦の新居を訪れ、荒廃した生活ぶりに幻滅し、現実目覚めて婚約解消する話がある。1950 年代には、アメリカの大学では、女子学生が妊娠による中退、早期結婚というパターンが少なくなかったのが現実なのに、ジュニア小説では性は描かれていない。アメリカでは 60 年代にブレイクした性革命が若年層にも及んでいくと、ジュニア小説の虚構性と物足りなさがいよいよ明らかになり、忘れられていく。

21 世紀の今なお読み継がれているのは、もっぱら家庭小説と少女探偵シリーズである。かつてのジュニア小説家たちもその後、ミステリーや旅行記などのジャンルに転向していった。

(10) ノン・フィクション

内村直也は劇作家であるが、秋元ジュニア・シリーズではいくつか翻訳を手がけ、「帆柱」3 部作を執筆した。執筆に際して誌上で高校の校長を招いて座談会が行われ、校長たちの要望を聞いていた。その娘、菅原暁子は学習院大学を中退して、アメリカの高校に留学した。『さて、ヤジ公』は『あしながおじさん』の後見人あての手紙の書き出し「ディア、ダディ」をもじった父親宛ての手紙形式の留學生活の報告である。留学といえどもホームステイ先の未亡人にメイド代わりにこき使われ、悪童に振り回される日々であった。彼女は続いて大学に進学し、続編『気にしない』

い、気にしない』も出版された。彼女の大学の専攻がヴィオラ演奏というのは、留学してただ大学の講義の単位をとるためでしかなく、特に何を勉強したいという目的はなかったらしい。それは多くのアメリカの学園小説の主人公と同様で、真面目な男の子は進学の目的を持ち、兵役もあり、ある程度職業観も持っているが、女の子の場合は向学心よりはむしろ結婚までのモラトリアム、ボーイハントとか自分探しという程度の動機である。

しかしもっと本気度の高い留学志望者のために A F S の日米交換学生の座談会も「友の会」サロンで開催され、アメリカの学園生活の生の体験を伝えている。そして読者から質問状が殺到したひとりが誌上で自分が滞在した寒村の、映画でいただいたアメリカ幻想を打ち破るような現状を述べ、A F S 留学は外遊ではないと訴え、自分の経験を国際親善に生かしたいと後輩にエールをおくっている。シリーズは後半、アマチュア作家の作品と共にノンフィクションが増えてくる。酒巻洋行『ちょっと行ってくる』はアメリカ西部の旅行記であるが、東部とはまるで雰囲気異なるアメリカを活写している。ルーズベルト大統領夫人やハリウッド女優のデビイ・レイノルズの回想記もある。

(11) イギリスの少女小説

秋元ジュニア・シリーズにはイギリスの作家の作品が入っていない。(ただし集英社コバルト・ブックスでは昭和 41 年、「サロンのページ」でエドナ・オブライエンの青春小説が紹介されて、集英社コンパクト・ブックスにはキングスレー賞受賞のその三部作が収められた。) この謎はアイルランド系イギリス人作家エリザベス・ボウエンによるアントニア・ホワイト著『五月の霜』の書評を読んだときに氷解した。イギリスにも「ガールズ・OWN・ペーパーズ」などの雑誌に掲載されたアンジェラ・ブラジルを筆頭とするおもに寄宿舎学校を舞台とした少女向け学園小説のシリーズが 20 世紀前半数多くあったが、それらをボウエンは全くリアリティを欠いているとして斬る。一方、ボウエンは「若草文庫」にも収録されたクーリッジの「ケイティ物語」やコレットの『学校のクロディーヌ』を少女時代に読んでいて、その価値を認めている。

(12) アメリカニズムの終焉

ジュニア・シリーズにイギリスの作家が含まれていないもう一つの大きな原因は戦後のアメリカニズムの影響力の大きさであると考えられる。テレビで 1958 年には『パパは何でも知っている』59 年に『うちのママは世界一』が放映され、50 年代アメリカの理想化されたファミリーライフのイメージが普及した。だが 60 年代になると離婚率が増加し、特に移民の親子間のジェネレーション・ギャップが顕在化し、アメリカン・ファミリー

一の幻想は破たんし、アメリカを最善とするアメリカニズムも減速していく。

(13) 結び

秋元ジュニア・シリーズ百巻目にして誌上で編集部座談会が開催された。シリーズは総計百五十万部売れたが、貸本屋、学校図書館、回し読みの読者を見込んで五百万人を越えるといわれる。秋元ジュニア・シリーズは戦後の若者の海外志向を支えるソフト・パワーであったといえる。

東京オリンピック開催の半年前の1964年に海外渡航自由化となり、秋元ジュニア・シリーズのラインアップからは外国翻訳小説は徐々に姿を消し、日本人の作家による日本の青春小説が主流となっていった。少女向け雑誌は学習雑誌、少女漫画、ファッション雑誌に分化していった。

かつてジュニア・シリーズのサロンでは、海外人気作家の住所を掲載し、ファンレターを奨励し、英文の文例まで掲載していた。そのような英語コミュニケーションの窓口は、その後、ラジオ講座の英会話テキスト『百万人の英語』など生きた大衆文化を多角的に伝える他のマスメディアに役割が移っていった。

少子化の時代にあっては、少女が年代にあったジュニア小説を読むことは、海外文化を知る以上に、母親業とか家族の絆など家庭人としての役割を学ぶためにも必要だと思われる。著名人の自伝やエッセイも若い人へのメッセージ性が高い。絶版となってしまった良書を掘り起こし、新訳を出していきたいと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者) 田中 慶子

[学会発表](計 4 件)

‘The Representation of Girls and doll-playing in Literature’ Making Sense of Play: the 2nd global conference, (Mansfield College, Oxford) July, 2013.

‘Good Mother, Bad Mother – Depictions of Mothers in Girls’ Literature’ The 36th South-west Popular and American Culture Association Annual Conference (Albuquerque, New Mexico) Feb. 2015

「少女小説に見るスクール・カースト」日本イギリス児童文学学会東日本支部春の例会(東京女子大学)2015年4月

‘The Dynamics of School Hierarchy as Seen in Juvenile Literature’ The Childhood Project: 5th global meeting, Exploitation and Danger (Mansfield College, Oxford) July 2015.

[図書](計 2 件)

Lynn A. Barnett, Keiko Tanaka et al. *Play of Individuals and Societies*. Oxford: Inter-disciplinary Press, July 2015, 202.

木村 正俊、小室 龍之介、太田 良子、田中 慶子他、『ボウエンを読む』音羽書房鶴見書店、2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 慶子 (TANAKA Keiko)

静岡産業大学・情報学部・准教授

研究者番号：40249248